

※ 本記事はブログ記事として提供しています。その範疇のものとして捉えて下さい。

言語指導の手前で行うマッチングのあれこれ

『初期の認知学習で、コミュニケーションを教えようと取り組む「マッチング」ですが、細かく見ていくといくつかの段階に分けられます。

① 「具体物一音」のマッチング

まずは具体物と音のマッチングがあります。例えば「アンパンマンのぬいぐるみ」は、私にとっても、先生にとっても、お母さんにとっても、お父さんにとっても「a,n,pa,n,ma,n」という音によって表されているという理解が成される段階です。この段階の獲得には子供（本人）—具体物—大人（支援者）という、具体物を挟んだ健全な3項関係の形成ができていることが前段階として必要です。自閉スペクトラム症など、感覚の過敏性を障害特性として持つお子さんは、①障害特性としての「人への興味の薄さ」から、「お母さん」や「先生」が抜け落ち「私—モノ」の二項的になりやすいことや②視覚・聴覚・触覚・嗅覚・嚙嚙・揺れ、加速などの前庭感覚などが、その子の注目をハイジャックして、特定のモノ（例えば水）への没入になったり、特定のモノ（例えば大きな声）への回避になったり、また、それに引っ張られることが原因での無視になったり、感覚過敏に引っ張られての不自然な長期記憶化になってしまいういう、三項関係へのなりにくさがあります。その際には、余計な視覚、聴覚、臭覚情報を遮るなどの環境を調整したうえで取り組むことが必要です。

② 「具体物—具体物」のマッチング

具体物と具体物のマッチングができるということが第二段階です。「目の前にあるアンパンマン」と「目の前にあるもう一つのアンパンマン」が同じであるということが理解できる段階です。

③ 「具体物—カード（写真）」のマッチング

例えば「りんご」の具体物と「りんごの写真」が同じものを表していることを理解する段階です。りんごの写真を差し出して「これ、ちょうどい」と伝えられると、具体物のりんごのことを指していることを理解して、差し出すことができると、この段階を通過したことになります。ただ、カードに最初に取り組む際にはコツがあって、小さいカードを最初からは作らず、1つのイラストにつきA5とかA4とかの大きさでカードを作ることが、この段階を早く通過していくコツです。

④ 「具体物—文字」のマッチング（かたまり読み）

例えば「あさのかい」とか「おんがく」とか「きゅうしょく」など、毎日見るカードをまとまり読みできるお子さんって結構たくさんいますよね。そういう子が「あさのかい」という文字を見て朝の会のイラストカードをとることができるようにこの段階を通過するということになります。また、文字を読むことができる子どもについてはイラストの大きさをだんだんと小さくしていき、カード内での文字の比率を大きくしていくという教材の工夫が有効です。

⑤ 「属性」の理解(PECS フェイズ4相当)

「りんご」や「ばなな」などをマッチングする場合は見た目や味などがほぼ一緒の物をマッチングすることになりますが、例えば「やさい」とか「どうぶつ」とかの理解は「りんご & ばなな & みかん =『やさい』という属性」とか、「犬 & 猫 & ブタ=



re,mo,n
(音)



『どうぶつ』という属性の理解になります。

⑥ 2語連鎖

ここまでで初めて要求（お茶 ください）や叙述（赤い くるま）という2語文が出てきます。

おなじだ!

—言語指導上の留意点—

言語指導では「離れている人」に「自分から」「伝えられる」ことを目指すことが基本のキです。ただ単にマッチングができるようになったとか、ただ単に文字が読めるようになったとか、ただ単に属性振り分けができるようになったとかということは、「単なる知識の獲得」をしたに過ぎません。自分からカードを差し出して要求を伝えられるとか、離れたところにいる先生にカードを私に行けるとか、遠くにいる人を音声言語で呼び止められるとか、そういうことを見据えてコミュニケーション指導をしないと、何のためにマッチングをしたのかわからない状態になってしまうので注意が必要です。

れもん
(文字)